

ループリック活用によるソーシャルワーク実践評価**ー医療生活相談室におけるループリック作成とソーシャルワーク実践評価の試みー**

○ 藤女子大学 丸山 正三 (006461)

キーワード：ソーシャルワーク実践評価、ループリック、パフォーマンス評価

1. 研究目的

2020年に社会福祉士養成のカリキュラム改正が行われ、ソーシャルワーク実習の科目では、教育に含むべき事項において「利用者や地域の状況を理解し、その生活上の課題（ニーズ）の把握、支援計画の作成と実施及び評価」と明記され、支援計画に基づく実施と評価まで行うこととなった。

一方で、ソーシャルワークの実践評価が十分取り組まれていないことが課題となっている。ソーシャルワークの実践評価が現場で行われていない場合、当然その実習においても実践評価に対する十分な学びは保障されない。ソーシャルワーク実習のカリキュラム改正に対応するのみならず、ソーシャルワーク実践の成果に対する説明責任を果たし、実践の質向上を目的とした実践評価を確実に行うことが喫緊の課題と考えられる。

そこで本研究では、ソーシャルワーク実践評価の実施上の課題を検討した上で、評価の信頼性と妥当性を担保するためにソーシャルワーク実践のループリックを作成し、そのループリックを活用した実践評価を試みた。ループリック作成は、筆者と一医療機関の医療生活相談室に所属するソーシャルワーカーとの共同研究によるものである。ループリックを活用した実践評価の試行結果から、従来より指摘されてきた実践評価実施上の課題にどこまで対応できるか、また、ループリック活用の意義を検討することを目的としている。

2. 研究の視点および方法

学校教育において、学習成果を把握するために種々のテストが実施されるが、学習者の理解や表現力、技能に対するパフォーマンス評価が行われるようになってきた。そのパフォーマンス評価において、評価指針となるループリックの作成と活用が進められている。ループリックは、評価観点ごとに尺度とその内容を示す記述語から構成される（田中 2003）。このループリックを用いることによって、教員などの評価者の判断に一貫性を与えると考えられている。また、ループリックは学習者に公開され、わかりやすく記述することで、学習者の自己評価を促進し、何を目指して学習すべきかを明らかにするとしている。

ソーシャルワーク実習の評価では、日本ソーシャルワーク教育学校連盟（2021）が「ソーシャルワーク実習指導・実習のための教育ガイドライン」および「モデル評価表」を作成しており、ソーシャルワーク実習の学習状況を評価する詳細なループリックと言える。

このように、教育場面でループリックの活用が進められている。しかし、ソーシャルワークの実践場面では、ループリックを活用した実践評価は一般化していない。

研究方法として、まずソーシャルワーク実践評価の課題について先行研究から整理した。

次に、共同研究者である4名（同一所属機関）のソーシャルワーカーに対するインタビューから「直近で対応した典型的な支援事例」を聴き取り、その内容の分析からソーシャルワーカーが心掛けていること、および目指している状態を明らかにした。このインタビュー結果をもとにループリックの原案をまとめ、4名のソーシャルワーカーと検討・修正を繰り返し作成した。そして、作成したループリックを活用し4名のソーシャルワーカー各々が実践評価を実施した。

3. 倫理的配慮

本研究は、日本社会福祉学会研究倫理規程に沿って行った。また、共同研究者においては所属医療機関の臨床研究倫理審査委員会の承認（2021-34）を得て行った。本研究報告について、共同研究者の承諾を得ている。

4. 研究結果

実践評価の課題について、岡本（1982）、渡部（2005）は、社会福祉領域における「実践評価の難しさ」を指摘している。また、日本では実践評価に関わる研究が少なく、実践現場に適用可能な評価方法が確立していない。

ループリックは、4つの評価観点と、それぞれの達成状況を3段階に分けて文章化した。また、達成状況は達成度を数量化できるように尺度を記した。4つの評価観点は、①重要な事柄の意思決定、②権利擁護、③生活移行への見通し、④生活課題への主体的取り組み、とした。達成状況について、①の場合、「(十分な達成) 入院中や退院後の生活について、十分検討して決めることができた(25)」 「(不十分) 入院中や退院後の生活について、決めることができたものの十分に検討できなかった(15)」 「(ほとんど達成できず) 入院中や退院後の生活について、決めることはできなかった(5)」とした（括弧内尺度）。

ループリックを用いた実践評価は、2022年1月～2月に支援を開始した27件に対し、インテーク時にループリック内容を説明し、終結となる退院時にクライアント（患者本人又は家族）に確認する形で評価を実施した（14件）。評価観点ごとの平均得点は①22.9、②24.3、③20.0、④20.0、であり合計の平均得点は84.3であった。

5. 考察

ループリックを用いた実践評価について、簡便性、クライアントとの共同評価、それによる評価の妥当性、ソーシャルワーク実践の改善に資する情報把握、などの意義が確認できた。特に実践評価の簡便性は、「実践評価の難しさ」を乗り越える要素となる。また、クライアントとの共同評価からクライアントの主観を踏まえた評価となり、評価の妥当性につながると考えられる。そして、評価尺度を数量化することで、評価結果を簡潔に示すことが可能となる。ただし、ループリックの作成方法、実践評価方法と評価結果の活用について、留意すべき点など更なる検討が必要と判断された。

文献. 田中耕治編著（2003）「教育評価の未来を拓く」 ミネルヴァ書房／岡本民夫（1982）「社会福祉実践の水準とその評価方法」社会福祉研究（30）／渡部律子（2005）「社会福祉実践における評価の視点」社会福祉研究（92）